

〔台記〕久安三年四月十七日庚戌、以長可補學官院別當之由仰親隆、所謂橘氏長者是也。年來正遠爲長者、件人不經藏人、先蹤多經藏人者爲長者、又以長父祖爲長者、又清則人正遠爲上、薦然而勘例、更不依位上下、是故改補之、不經奏聞、但今度密奏法皇、鳥羽、雖有可許、日來有日憚、昨廢務、因及今日、戊刻以長申慶、是先例云々、不申他所云々、

補院別當書樣 依先例

散位從五位下橘朝臣以長

被是定内大臣宣備、件人宜令補任院別當者、

久安三年四月十七日

別當民部權大輔藤原朝臣親隆奉

以下家司送以長宅、以長給祿、

後日六招範家令奏曰、學官院別當憤近例、以是定宣補之了、而見天曆御記、以勅宣可補之由所見也、

所宛篤康保四年三月廿二日、早可被下宣旨、又其次以以長可爲檀林寺別當之由同可被宣下、此事見同御記所宛篤康

保三年十月廿五日、範家仰曰、檀林寺別當、代々以納言參議補之、更無定氏、今上御時、所宛以公能卿補了、學官

院、天曆御時、以勅宣補之、然而其後無所見、忽難宣下歟、余藤原申曰、檀林寺事者、余所奏誤也、學官

院事、天曆御記明白也、被下宣旨、何難之有乎、則檀林寺不可知行之由仰以長、廿二日乙卯、早旦以

長來、依初申氏覽橘清資六名簿、申曰、爲功課別當者、予許之、返給名簿、予不裝束、依吉日初申也、

〔倭訓栞前編十三〕せぢやう 是定のよみ也、橘家衰微の後、長者の號ありといへども、唯學館院の

領を知らばかりにて、氏爵に於ては、是定は其人を撰み、宣旨を下さる、をいふ、近代九條家に傳へ

らる、よて橘家は皆其家に屬せり、西宮記には、氏定と見えて、氏とはと通するわけは、うちの下に

見えたり、江家次第に、中納言橘澄清、以中關白爲是定、令知學生事と見え、職原抄に於氏爵者、是定

之人舉之、是定者、擇其人被下宣旨也と見えたる、此義なり、